

然し無闇に獄力種や太鼓などを叩いて不秩序な示威行列などする事は是止めにならぬと思つて居る。今度の三菱、川崎の職工の要求した事に就ても尤だと思ふ點もあるが又尤もだと思へない點もある。職工から云へば以前事業の盛であつた時から比べて約四割も収入が減つたものもあると云ふから賃銀を増して貰ひたいのは當然であらうけれども會社の方になつて見れば事業が衰へ、爲る仕事が減じて居るのだから自然職工の収入も減ずるのは之亦當然である。兎に角會社と職工間も共に自重し職工間も嘆願をするならするで今直に此の要求を容れよ、容れなければ彼斯と云ふやうな短兵急な事を云はず、一應容れよが好いと考へる。云々

五、労働者の空氣俄然一變す

無智なる青禪隊の蠻行は神戸に於ける労働組合聯合團をして、同盟罷業決行の意志を確然として定めしめたり。恐らく神戸に於ける爭議は青禪隊の一舉なかりせば彼の如き發展を見ざりしならんと言ひ得べし。六月二十六日以後七月七日まで三菱、川崎各部の蹶起を見たりと雖、未だ何人も徹底的に戦はんと云ふ意圖なかりき、少くとも最高幹部の意嚮としては川崎に於ては各部が逐次要求を提示したる後暫く鋒を藏して松方社長の歸朝を待つべく、又三菱に於ては相當のところにて然るべき結末をつけんと言ふ程度の極めて暢氣なる態度なりしが、青禪隊蜂起の夜神戸聯合會に於て催されたる組合聯合團代議員會（約三十名參集）に到りて俄然空氣一變し、今や何人の力を以てするも如何とも爲し難きに到れり。即ち聯合會としては青禪隊使用の兇器が山川技師に依り提供せられたる點より類推し、會社と片福組との間に靈犀一點相通するものあるを思はしむるに到り、會社側に於て斯くの如くんば

死すとも闘はざるべからずと抑へられたる激情を勃發せしめ、著しく階級心理を煽られ茲に戦ひの臍を固むるに到りたるなり。思ふて此處に到れば無智は重大なる罪惡なりとの言鑑みて眞なり言はざるべからず。

註二 九日青禪隊中の一兇漢逮捕されたり。事件の起るや相生橋警察及び縣刑事課は協力その加害者を嚴探し暴行者十二名を檢舉したるも、短刀を握つて川崎電氣工作部職工武庫郡本山村字岡本國方曉二（二九）の背部を斬り重傷を負はせたる兇漢判明せざりしが八日夜に至りて逮捕したり。犯人は大阪府堺市甲斐町西一丁目當時神戸市石井大同町三丁目三十一番土木請負業島崎太郎方同居土方山本傳次郎（二八）にて同人は七日正午頃新開地を通行中誰云ふとなく富永の乾兒が川崎造船所構内にて喧嘩をしてゐるとの噂を聞き自分の親分と關係ある富永の喧嘩を餘處にできぬと飛び歸り親分後太郎にそれを傳へ、已は喧嘩裁となりヒ首を呑み富永の乾分に身方する積りにて川崎造船所に到るや川崎造船所專屬のベンキ職片福組の配下控え居て喧嘩では無い職工の暴行に備へて居ると云ふを聞き（片福組の親分松尾福次郎と傳次郎の親分俊太とは兄弟分の間柄）共に警戒に備える事を頼まれ青禪を貰ひ待ち構へしに果して午後三時頃三菱造船の職工が應援の喊聲を擧げ來れるに應じ川崎造船の職工も亦喊聲を擧げ門前へ出でんとするを傳次郎等が制止せんとしたるも肯かれず却て歐打せられし爲め傳次郎はヒ首を引き抜き無二無三に斬り廻り最後一人の背を突き刺したる旨自白したり。（又神日報大要、七、一〇）

六、遂に「川崎」全部の罷業

七月八日は神戸爭議が罷業化の第一日なり其日各方面に於ける狀勢が昨とは著しく相違せり。

川崎本工場狀勢 前日突如として現れたる青禪隊の暴行に憤れる川崎造船所の職工は八日定刻の午前七時に全部出勤し、七時半就業の汽笛と同時に依然各工場一齊に大動搖を始め石油空罐を打ち